



「交流人口」を増やして小樽を元気にしよう

国立大学法人 小樽商科大学 ビジネス創造センター 副センター長 大津 晶
社会情報学科 准教授

北海道と小樽の将来人口予測

4月18日付北海道新聞の朝刊1面に「道内人口、40年に414万人に減」の見出しが躍りました。これは北海道経済連合会が行った調査と推計によるもので、これに基づく道内経済の見直し、および高規格幹線等の整備がもたらす交流人口の増加と域内生活基盤の補完機能の向上による地域産業の活性化が提案されています（報告書概要は同会ウェブサイトで公開中）。さて、戦後ずっと増加を続けてきた日本の人口が減少に転じたのは2005年とされていますが、北海道については1998年をピークに緩やかに減少を続けており、2009年12月末は住民基本台帳ベースで2005年比3.1%減の5,541,598人と公表されています。さらに小樽について見てみると、同期間に11%強減少して現在は133,604人となっています。道経連の人口推定の基礎にもなっている国立社会保障・人口問題研究所の将来人口推計によれば、2035年小樽の人口は2005年比ほぼ4割減の83,945人と予測されています。

5つの人口の変化

念のため、前述の推計人口はあくまでもいくつかの仮定に基づいて算出されたもので、推計方法を理解して用いる必要があります。当然実際の人口とは多少の差がありますし、5年ごとの国勢調査のたびに推計し直されてもいます（過去の推計よりも下方修正されることが多いのですが）。いずれにしても私たちの社会は本格的な人口減少局面に入ったわけで、数年前まで散見された“楽観的な”将来人口フレームも、さすがにこのところは目にしなくなりました。さて、人口（数）の変化以上に危機感をもって語られるのが人口構成の変化すなわち少子高齢化ですが、これについては「いやになるほど」毎日聞かされているはずですのでここでは触れないことにします。むしろ相対的に高齢者数が増えれば、その高齢者層がどのような状態にあるか、という視点が重要になるわけですが、年齢や健康状態だけでなく社会的な属性が急速に多様化している現在は、地域レベルでも人口属性の変化を正しく捉える必要があります。そうすると、人口の空間分布の把握についても相応の緻密さが求められることとなりますが、GIS（地理情報システム）の発達と普及により、現在は驚くほどきめ細かい分析が可能となっており今後はこれに基づく政策が期待されます。前出の道経連の分析にも10kmメッシュデータが用いられていますし、小樽市のウェブサイトには町丁別の人口データが公開されています。最後にこれらの「変化」以上に今後重要な調査対象になるのが、人口流動または移動の変化です。同様の視点から近年急速に用いられるようになったキーワードが「交流人口」で、減少する一方の「定住人口」に代わって今後増加させるべき政策目標となっているのですが、その内容は、いまのと

ころ「観光入込客数」と大差ないものがほとんどのようです。

時間軸でとらえる交流人口

小樽観光の滞在時間が年々短くなっていることをご存知の方も多いと思います。このように単に観光客の人数だけでなく、「人×時間」の総量を増やすという考え方が定着してきているのは良いことだと思います。ただ、この指標は人数が倍になることと時間が倍になることを区別できませんが、目標を達成するための政策が異なることに注意が必要です。また1泊を2泊にするのと2週間の滞在を1ヶ月にするには違う工夫が必要だし、年1回の来樽と週1回するリピーターに同じアプローチは通用しないでしょう。重要なことは、2時間の滞在から移住までの行動を時間軸でセグメンテーションし、適切なマーケティングに基づくサービス向上が必要だということです。

空間軸でとらえる交流人口

つぎに交流人口を空間軸で見てください。710万人の観光客に対しても、道内外あるいは海外という起點属性ごとのプロモーションが必要なのは言うまでもありません。さらに、“交流＝観光”という前提から離れてみれば、通勤や通学も、またもっとミクロに見れば、近所の散歩ですらある種の交流と言えると思います。コンパクトシティ政策や中心市街地活性化計画も、定住人口の減少環境における域内交流の活性化という位置づけが可能になります。さらに頭を柔らかくすると、全国のデパ地下や中国などにも展開している小樽物産展やウェブを活用した小樽のPRは、モノや情報を介した他地域との交流ですし、「小樽ファンが支えるふるさとまちづくり（ふるさと納税制度）」事業も、小樽に縁のある市内外のみなさんとの心の交流がかたちになった結果として、全国自治体のなかでも高い実績があがっていると言って良いと思います。

交流の場としての大学、交流を通じて学ぶ大学生

わたくしは「小樽商科大学マジプロ」を企画運営し、また「翔楽舞」の顧問も務めておりますが、大学／大学生には、地域交流の量と質を高めるポテンシャルがまだまだあると考えています。またここ数年の活動を通じて、学生自身が地域との交流によって驚くほど成長する姿も数多く見てきました。昨年からは始まった「市民と学生の交流会」も4月末に第3回目が開催されることになっています。昨年の1年生（新2年生）の小樽在住者が7割程度になっていることもそうした諸々の活動の結果だろうと考えているところです。4年間という“長期滞在”をした若者は、きっと将来全国、世界中で活躍し、ますます“小樽つながり”の交流の輪を拡げてくれるはずです。今後みなさまの暖かい応援をお願いいたします。